竜巻関連情報の利活用に関するヒアリング結果

■屋外イベント関連（エア遊具）

1. 本社が気象情報を収集して、現場と気象状況をやり取りしながら、現場責任者の判断でイベントの中止や飛散しやすいものを片付けるなど、状況に応じて細かな対応が可能である。
2. 本社が格子分布の竜巻ナウキャストを含めた気象状況を伝えることで、現場の判断を支援できると考える。

■屋外イベント関連（テーマパーク）

・安全対策については、段階的な対応ステージ（レベル）を設けている。中央のセキュリティセンタのほか各施設の安全担当責任者も、風速計の値や気象予測を随時監視できるようになっており、それぞれが安全対策のステージを判断している。民間気象会社からは、対応ステージの判断に寄与するタイミングで情報提供を受けており、竜巻関連情報もそのなかで活用されることになる。

・竜巻等の激しい突風を伴うような発達した積乱雲が近づく時の対応については、すでに雷などへの安全対策措置済みの状況下であり、更に必要な措置は何かということになる。今の精度では、竜巻関連情報を施設の運行を中止するなどさらに上位の対策に連動させることはできないが、各施設の安全担当責任者が行う直近の判断支援には活用できると思う。

■建設業関連

・実際に竜巻の発生に至らないことも多いようだが、落雷や突風、急な強い雨となるおそれも高いことを踏まえると、現場に連絡し、足場や資材の緊急的な補強に活用することが十分に期待される。

・年間数回程度の発現頻度であれば、突風の影響が大きい施設（クレーンなど）については、1 時間後までの予測も含めて発生確度 2 の発現に連動して対策を行うこともありえる。

■民間気象事業者関連

・竜巻ナウキャスト(仮称)の提供により、新たな携帯電話サービスのほか、ホームページや固定 PC（防災端末）では、気象レーダーと組み合わせた表示なども考えられる。

・特定の利用者向けとして状況に応じたスポット的情報提供を行うサービスにあたっては、竜巻注意情報や、竜巻ナウキャストが発表される気象状況となった時に、お客様がどのような対応をすれば良いのか（対応すべきことがあるのか）、まずはその整理を行い、その行動開始判断に資するタイミングで情報提供できるようにする必要がある。

■鉄道事業者

・今の精度では空振りが多すぎるため、竜巻ナウキャストの発生確度1や2の出現と列車の徐行・停止と連動させる活用は現実的ではない。列車の徐行・停止に活用するためには、例えば、沿線の気象状況との組み合わせなどにより、警戒すべき路線を時間的・空間的に更に絞込む必要があり、このような調査研究・技術開発を進める必要がある。